

質疑及びコメント 質問者 A~G、コメント H~N

A：学校教育の制度的枠組みの中に「哲学」（「倫理」が現行であるが）を確保するという点についての見通しはどう考えるか。

B：哲学史重視は教養主義の残り。初等中等教育に哲学史は必要か。

また、日本の哲学会が「～について論文」で締められていることともこれは関係がある。学会の変革も同時に必要ではないか。

C：Secondary Education での哲学重視は世界のトレンドになっているが、日本の体制はそうっていない。かなり古いものをそのままにしている。アムネスティから文科省に宛てたアンケートもなしのつぶてになっているが、日本哲学会からも働きかけをしてはどうか。

D：理科系を含めた分野との連携を具体的にどう考えるか。また、対話式での哲学教育を経験のない人にも授業できるようにどう標準化するかという問題があるがこの点はどうか。

E：教員養成課程では哲学や倫理の教員がどんどん減っている。このままではここで論じられた哲学教育をする素地すらなくなるのではないかと危惧している。

F：「哲学」という名称には「難解・深淵」というイメージが結びつきやすい。哲学という名前を前面に出すことで実現へのハードルが高くなるのではないか。

G：各教科に分散した場合の「哲学」は薄まってしまう気がする。学校教育の中での哲学の意義はどこに見いだすか。また、…

H：高校での哲学の教育というと「倫理」科目を考えがちだが、河野氏が触れたように、「家庭科」Oiconomicus も哲学（政治哲学）の重要な一部分ではないか。この視野について、現状と可能性の両面で意見を伺いたい。

I：哲学と市民性とは本当に調和的なのか。ソクラテスの場合はどうか。徹底したらやばくなるくらいじゃないと哲学ではないのではないか。

J：私どもも数十年来大阪哲学学校という哲学運動を行っている。ほかにも若い世代の哲学カフェ運動もある。これらをどう位置づけるのか。

K：河野さんへの質問。初等・中等・大学での哲学教育は同質でよいのだろうか。戦前までは、初等教育は修身（皇民教育、ちなみに戦後の「公民」は「皇民」の言い換え）として庶民向け、高等教育は哲学としてエリート向けとして質的な

差があった。(哲学館事件 1902 では、ミューアヘッド倫理学を学ぶ権利が帝大生にかぎられていたことが明らかになりました)

L: 木阪先生、ご提案の高校公民か倫理と大学教養教育との統合(相互支援)はじつに適切かつ重要な意義を持つと思います。河野先生、木阪先生とお同じく教科書作成のご提案を含むと思いますが、お二人のアプローチはまったく異なっているように思います。わが国の学校教育が行き詰まり状況にあることは自明ですが、その原因を教育方法論のみ求めるのは過度の単純化ではないのか。というのは、明治維新以降の近代化を支えてきた大きな理由は日本の学校教育にあったと考えられるからです。つまりこの問題には歴史的視点の導入も必要だと思います。

M: 教員養成課程において、ディスカッションを用いる講義と演習は哲学あるいは倫理学だけと気づかされた。グループワークを取り入れた講義を試してきたが、今後は例えば小学校教員を目指す上での学部カリキュラム上の位置づけも視野に入れていきたい。ありがとうございました。

N: すべての教科を非常に大きく捉えてその根本をその根本からすべてを説明させてみるという仕方で「哲学する」ことを高校教育の中に導入するというのはどうでしょうか？